

一致・組合両教会合併問題についての断片的な覚え書

手塚 竜 磨

本題にふれるまえに、プロテスタント伝道の処女地日本において、初期宣教師たちにより試みられ、採用された既成教派にとわれない超教派的な組織である「公会」が、日本人のキリスト教受容に他国ではみられぬ新生面を拓いたことの意味をあきらかにしておきたい。

明治五年横浜公会の成立をみるまでには、さまざまな難題があり、とくに教会組織については異論が多かったが、これを最終的にとりまとめたのはアメリカン・ボードのグリーンであったことも記憶されなければならぬ。オランダ改革派のブラウンは「公会」を、“The Church of Christ in Japan”と云々、日本の教会が単一で米国その他の国のように、分派により信徒を迷わせ教会の力を弱めなかったこの組織の成立を高く評価している。

横浜に続いて東京、神戸、大阪に教派名を掲げない公会が成立したが、長くは続かず、長老派の一部が分離、メソジスト派も教派名を掲げる教会をたてた。すべて宣教師が指導したもので、アメリカン・ボードの場合は新島襄帰国後の所産だった。それだけに、公会

制度の崩壊は、日本プロテスタント史にとって最初の悲しむべきつまづきとなったといえる。

島国的、宗派的とみられた日本人も、キリスト教に対しては大らかで、分派的でなく、その土地に導入されたものに近づいて聖書のコトバを受け入れ、信条・教会制度の差違などをあげつらうものはなかった。公会制度は渡来宣教師たちの英知と日本の入信者との協力による、もっとも望ましい体制であったと回顧される。

この体制が崩壊したのは、米国におけるデノミネーションリズムの導入によるもので、次に起きた危機は、ここにとりあげる一致・組合両教会合併問題のつまづきによるものであった。ともにカルヴァイニズムを信条とする両派が、教会政治の点で折り合わず、挫折、不成立に終わったことは、わが国のプロテスタント史上最大の痛恨事として教団成立後の現在までも残念さは隠しきれない。

ここで新島襄全集2の「宗教編」が登場する。両派合併問題関係稿として十八稿を収めているが、長短の差はあるけれども、内容にさほどの違いはみられず、一貫して強靱な教条的ともいえる信念が

披歴されていて一本気な新島の性格が浮き彫りにされている。とくに、用語には違和感をもたれる。一世紀も前の用語をとりあげ、あげつらう訳ではないが、対立を鮮明にするためとしても、「寡人政府・共和政府」、「寡人政府主義ハ古来ノ遺伝物・衆治主義（平民主義）ハ近世ノ新發明」と対比し、「貴族の即中央集権政治・共和的即地方分権主義」という表現にいたっては、教会内の組織制度に政党政治用語の乱用が目立ちすぎる。中央集権対地方分権という概念は教会組織の場合には相手を刺激するだけで適切でない。

社会生活の大半を、市吏員（地方公務員）としてすごしたものととり、この用語はいつも身近にきかれた。政治学・行政学の学究ではなくとも、地方行政の実践者としてJ・S・ミルの「代議政治論」(Considerations on Representative Government, 1861) はいつも座右において読んだ指南書で、中村正直が経営する同人社と同人社女学校では教科書に使用していた名著でもある。巻末に近い「地方議会について」のなかに、「権力は地方分権化されなければならぬが、知識はもっとも有用になるためには、中央集権化されなければならない」（山下重一訳）という数行があつて、イギリスの地方制度がすぐれていることを知らされた。おそらく、この考えは米國でも実践されたと思われ、権力の分散と知識の集中という考えは対立・相克を助長、誘発するものでないことを知った。ミルの見解は戦後のわが国の地方制度のなかにも生かされている。

寡人政治は、寡頭政治・独裁政治に通ずる用語であつて、合併を考慮している相手方に対してはつしむべきであつた。貴族的主義の使用も妥当を欠いている。合併問題が討議されていた明治二十年

当時、組合は五三万、一致は六九万の会員を擁していた（笠原一男編「日本宗教史年表」による）。対等合併にはむずかしい数字であつたかも知れない。新島は「合併」ではないかと懸念していた。組合側の会合でグリーンは米國では無理でも、制度では日本の方が優つていると賛成し、J・ギューリックもハワイ同様協同精神があるからと賛同している。アトキンソンは土佐での経験から「大魚に吞まれたヨナ」の故事をとりあげ、同労者杉浦義一は自分の教会は支店扱いにされているとぼやいた。海老名は吞み込む呑み込まれるなどというのは邪智千万と一蹴、宮川は掌大の日本に数多くの宗旨は好ましくない、万国を通じ無宗派にしたいといい、新島は今急に政界の異なるものを無理に一致させようとするのはいけないと発言、まとまることは不可能だった（「同志社談叢」第三号所収の報告による）。

これ以前、明治十五年九月、小崎弘道の新桜田町教会（靈南坂教会の前身）と粟津高明の日本教会が合併して東京第一基督教会を設立したとき、新島が述べたあいさつが「宗教編」にみられる。「齊ニ長成セハ齊言ヲ好ミ、楚ニ長成セハ楚言ヲ好ムノ類ハナキニシモアラス」と懸念しているが、この合併とその後の進展に対し湯浅与三は「伸び行く教会」のなかで、小崎の手腕を高く評価している。粟津高明は明治元年バラから受洗した旧藩所藩士で、海軍兵学寮教官をつとめた少佐、新栄教会を離れ明治八年日本教会を創立、海軍時代の同僚和田秀豊はそのあとを慕って牧会に入り社会福祉事業に従事し好善社の初代社長となった。一致・組合のふたつの流れは東京では見事に合併開花し新島の懸念をよそに、のちの靈南坂教会の

土壌をつちかった。

すでに述べたように、熊本バンド出身者は合併問題に関する限り新島の子で弟子ではなかった。むしろ人間的にはジェインズに傾斜していたとみるべきであろう。このことは Kumamoto, An Episode in Japan's Break from Feudalism by Captain L. L. Jones (『史料彙報』二四集所収)を一読すれば瞭然とする。ジェインズは長崎にいたヴァーベックの推薦で肥後藩に雇われ熊本洋学校で教えた。夫人の父スカッダーはヴァーベックと同じリフォームド派の牧師で、のち会衆派に転じ、ジェインズ自身は無教派主義だった。推薦者のヴァーベックは太政官顧問として迎えられた関係もあって宣教に専念できなかったが、グリフィスの言のように「国籍なき市民」だっただけでなく、ブラウン、バラ同様、教派にとらわれぬキリスト者だった。奉教趣意書をよみあげ花岡山で結盟した青年たちは長崎に居住するC・M・Sのハーバート・モンドレルやヴァーベックの後任者ヘンリー・スタウトからの受洗を拒否し、あえてレーマンであるジェインズを選んだ。この受洗にはデイヴィスも同意している。

ジェインズはつねに、日本が米国に報ゆる一大事は教派合同にあると語っている。市原盛宏は同志社入学を前に新島に書を寄せ、同志社が宗派主義にたつのかどうかをたしかめた。「宗派の念慮は抱かずただ聖書を基本とする」という返書をたずさえ、欣然と故山を出た。しかしのちに裏切られたと不満を述べている。小崎は新島、デイヴィスにはジェインズほどの学徳がないと語り、安中時代新島から按手札を受けて熊本に転じた海老名は、牧会のかたわら熊本英

学校と女学校をたて、長くは続かなかったがジェインズの育英事業の継承をはかった。

新島の紹介でアマースト大学に入学した内村鑑三は、在学中同志社で働きたいと考えたことがある。しかし帰国早々新島の招きを受けた時受諾しなかった。新島の経営のあり方が、「かなりの程度、外国に依存するものであったので、独立心の旺盛な内村は、このようであり方に同意できなかった」として北越学館を選んだ。だが、ここでもアメリカン・ボードの宣教師や牧師の成瀬仁蔵と衝突した(関根正雄「内村鑑三」)。

一致教会側の両教会合同問題関係史料を「井深梶之助とその時代」に探ってみよう。この書では合併を避けて合同を用いている。語感からくるのだが、合併には新島が嫌った吞併が、合同には新島が望んだ対等合同が感じられて妙である。

一致側には植村正久、山本秀煌、田村直臣が名をつらね、山本は長老派のタムソンが本国のミッションボードと財政関係をたつことを決意したほどの無宗派主義者だったと語り、植村は新島の宗派主義をするどく批判しているが、彼の批判精神はたくましくのちのちまでも続いた。田村は長老派でもタムソンと対立したカロザースの弟子らしく、合同に反対の立場から一致・組合とも新島の意見を見無視し、熊本バンドは多数をたのみ新島を棚上げしようとしたことを責め、ニューヨーク州では一、二の例外はあるけれど会衆教会が長老教会に吞併された事実をのべている。

このほか、会合の席でのアメリカン・ボード側の証言がみられる。デフォレストは、アメリカン・ボードが諸国へ送る宣教師は会

衆派だけでなく、長老・監督・メソジスト、その他からも出ていること、ラットランドでのボードの年会の際、新島のキリスト教学校設立の訴えをきいて、最初に寄付を申し出たのは長老派のドッジであり、わずかながらも寄付金を寄せた老婆はバプテスト派、死期が迫っているのと申し出たスエットはユニテリアンだったと名をあげ、アメリカン・ボードの本来の性格をのべている。ゴードンはボードに所属しているが、元来はカンバーランド長老派であると教派を明かにし、人心を救うという大目的を第二とし、区々たる儀式・礼典・衣服・神学の差異に拘泥するのが第一目的であるとはなげかわしいと述べている。これに対しデイヴィスは合同は困難だが不可能ではないと語りながらも、ボードについては三十年前と事情が違い、九九パーセントを会衆派が占め、他派はそれ以前に別のミッションボードをつくったことを明かにし、在日アメリカン・ボードが分裂・対立状態にあることを示した。

合同問題関係記録のなかの圧巻は、明治二十一年十一月、新島から井深あてに送られた書簡である。その内容は岩波文庫版によっても伺えるが、ここではひと味違った感触をうける。中味に変わりはないが情感にあふれている。疑義を正すため井深が送った書簡に対する返事であるがきわめて丁寧で、十歳以上の年長者にしては、意外の感があるが、その理由を知れば成程とうなずける。

新島夫人八重は井深と同藩の出である。それだけではない。会津籠城のときの記録が第一巻の最初に出ている。断髪・洋服着用用の男装の山本八重が君公の前で、敵軍の打ち込んだ榴散弾を分解して説明役をつとめた時の描写は、ただひとりの目撃者である井深ならで

はの観察記録である。

井深の結婚は新島没後のことで、生前知る由もなかったが、八重は伝えきいたと思う。井深夫人花子は岡山藩の出身、神戸女学院時代神戸組合教会で松山高吉から受洗、アメリカン・ボードが資金を提供していた鳥取英和女学校で教え、マウント・ホリヨーク女子大学に留学、学位を受けて帰国、母校の教授として理化学を担当したが、結婚のため上京し、主婦をつとめる傍ら女子学院（長老系）や東洋英和女学校（カナダメソジスト系）で教えた。

新島はよく教会合併を結婚にたとえ、早婚はいけない、嫁入りにとは不同意だとしたが、個人と個人との思慮ある結合にはふれなかった。

二つの教会の合併が成立したら北海道へいくと語った新島の札幌でのそれ以前の出来事にふれてみよう。明治二十年、この地で静養中のころ、札幌バンド出身者を中心とする札幌独立教会で、資格のない平信徒が洗礼・聖餐の司式を行ったという事件の調停役を買って出た。教会員は、米国メソジスト監督教会とイギリス系聖公会に所属した人たちが構成されていたが、独立とは、すべての教派からの独立を意味し、したがって無教派を標榜する教会だった。レーマンで牧師職をつとめる大島正健を東京に引っぱりだし、一番町の一致教会で一致・組合両教会の七牧師立合いのもとに按手礼を行った。その後の新島の言動とはまったく裏腹だと思われるが、私は新島のこのときとった態度にキリスト者としての正しい姿勢の片鱗をみることができた思いである。新島は弟子のだれもが文句をいわずについていくというようなカリスマ的指導者でなかったことは一つの

救いでありたいと思うのである。

最後に、昭和二年九月、帰国に際しラーネッドが組合教会に送った別れのメッセージについて一言したい。在日五十年、同志社教育に専念した老教授は、説教者としてでなく教師として来日したものに、組合教会の牧師や教員に助言する権能はなかったとしながら

扉の書簡について

「小矢野教兄」宛になっているが、正しくは小谷野で、名は敬三である。また日付の六月二十五日は、後述の理由により明治二十一年と推定される。

小谷野敬三は明治十八（一八八五）年にアーモスト大学を卒業し、しばらくイェール大学に学んだ後、アンドーヴァー神学校に転じて、二十二年に同校を卒業した。だから、新島の後輩ということになる。

この手紙が書かれたころ、小谷野はアンドーヴァー神学校に在学中であり、新島は募金運動のため東京にいた。新島の日記「漫遊記」の記述の中に、「内村（鑑三）氏来ル、新潟将来ノ事ヲ話し、加藤（勝弥）ニ書ヲ送（リ）古屋野氏ニ書ヲ遺ル事ニ決ス」（明治二十一年六月二十三日）とあり、さらに三日後の六月二十六日の項には、「アンドウ古屋野ニ一書ヲ送ル、新潟行ノ事ヲススムルナリ」と記されている。扉の書簡はこのときのもので、日付が六月二十五日で日記とは一日ずれているが、それはありうることであろう。

日記の中の「新潟」とは、明治二十年十月に新潟に開校した北越学園（同二十四年十二月廃校）のことであり、加藤は地元の有

も、組合教会と米国の会衆教会の間には「友誼」以外に結びつきはなかったと述べ、日本で経験した最大の失望の一つは組合・一致両教会の合同が失敗したことであると回想した。いつまでも心打たれるメッセージである。（一九五三・七・一二）

（大正十年旧制大学英文科卒業・元東京都政史料館長）

力者で初代館長であった。新島はかねがね北越伝道の必要性を痛感していたので、加藤館長の依頼をうけて教員人事について協力したのである。おそらくその新島のすすめによるものと思われるが、内村鑑三が米国から帰国したのは、明治二十一年五月十六日で、六月六日に北越学園の初代教頭に就任した。しかし、その内村は外国人教員・宣教師らと学校の運営方針等で意見を異にし、教員人事問題などについて新島に相談をもちかけていたようである。内村は同年十二月に辞任しているから、最初からあまり乗り気ではなかったであろう。（詳しくは本井康博「新島襄と加藤勝弥」『同志社談叢』創刊号、参照）

以上のような経緯のなかで、扉の書簡は書かれた。新島は懇切に新潟での働きをすすめている。しかし小谷野はそのすすめには応じず、翌明治二十二年十二月初帰国して、東京とその近辺で伝道活動に従事した後、教員として岩手や岡山に赴き、やがて東京商科大学（現一橋大学）の教授などをつとめて、昭和十四年十二月に生涯を終えた。

この書簡は、小谷野敬三氏の三男正男氏（元明治大学教授）から、他の小谷野資料とともに、昭和五十八年五月七日に同志社へご寄付いただいたもので、『新島襄全集』第四巻「和文書簡編Ⅱ」に全文を収録する予定である。

（河野仁昭）

新島襄先生の説教

—新島襄全集2（宗教編）について—

遠 藤 彰

一

新島襄全集の第二巻が宗教編として、本年七月に刊行された。内容は、説教稿Ⅰ、説教稿Ⅱ、宗教関係演説稿、説教・演説稿断片、教会合併問題関係稿、第二公会録事『脩身学』、注解、解題である。編集委員は、委員長上野直蔵、委員高橋虔、オーテス・ケリー、北垣宗治、島尾永康、杉井六郎、園部望、河野仁昭の諸氏で、第一巻と変わりは無いが、本巻の責任者は高橋虔先生であり巻末所載の周到な解題は先生の手によるものである。

説教稿ⅠとⅡにはそれぞれ新島先生の説教草稿四八編と三四編を収め、宗教関係演説稿の部には一〇編、説教・演説稿断片としては二九編を収録している。さらに、教会合併問題関係稿の部には、一致・組合両教会の合併問題について新島先生の記述した意見書一八稿と日本基督教会憲法並細則附録（明治二年五月）を列記、ついで第二公会（後の同志社教会）の記録、最後に Mark Hopkins, Lecturers on Moral Science, 1862 の宮川経輝の訳文に新島先生

が補筆したものを掲げ、巻末の注解と解題を含めて、全巻六八ページにおよぶ大著である。

本巻の中心を構成する部分は、説教稿ⅠとⅡに分類された新島先生の説教の草稿の収録部分である。Ⅰには明治一三年から二〇年からのものが年代順に、Ⅱには年代不明のものが引用聖書本文の順に配列されている。宗教関係演説稿の部分には、「基督教皇張論」や「道徳論」などの講演がこれも年代の明らかなものはその順に、不明のもの二編はその後配置されている。説教・演説稿断片として収録されたものは、いずれも、簡単な個条書きのあら筋に、線や○印や△印で図示がなされ、朱筆で囲まれたり注記が加えられたり、英文が混在したりする断片的草稿であり、なかには判読の困難なものもあるが、これらもまた新島研究の貴重な資料であることはいうまでもない。一致・組合教会合併問題についての諸稿本は、晩年の新島先生が深く関与し、かつ苦悩した重大問題についての意見の開陳書であって、先生の教会やキリスト教、ひいては同志社やキリスト教主義学校教育の根本に関する考え方を知る上での得難い資料で

ある。第二公会録事は先生の邸で発足し、自らが仮牧師として指導に当たったこの公会の初期の記録であり、同じ明治九年に相前後して開設された第一、第三公会がのちに合併して平安教会となったのに比し、この第二公会はやがて同志社教会と改称し同志社と共に成長発展した教会であるので、当教会にとっては勿論のことながら、新島・同志社研究にとっても重要な記録であることは言うまでもない。最後にホプキンスの『脩身学』の訳文が収録されているのは何か奇異の感を与えるが、前述のごとく弟子宮川徑輝の訳文に新島先生が補筆し、訂正し、圈点を施し、しかもそれがかなりの量に上ることと、同志社創設期にはカリキュラムに聖書を入れることが府によって許可されず、やむを得ず課外で（いわゆる二〇番教室において）教授を行ったのであったが、正課としてはその替りにこの『脩身学』をテキストとして課したものであることから、編集委員会はこれを本巻に収録したと思われる。その上に、後述のごとく、新島先生の思想の神学的基盤形成には、ニューイングランド神学の影響が強く働いていたが、この Mark Hopkins (1802-87) はその指導的神学者の一人であったので、この書がテキストとして採用されたのであろう。その意味で、新島要全集の宗教編に収録されたことには、意味があろうと思われる。

二

新島先生は、その思想を開陳し論述するに際してのメディアとして、一つには書簡を用い、二つには説教や講演を用いた。おびただしい数に上る書簡の中に、先生の人柄や心情とともにその思想もま

た豊かに展開された。例えば、いわゆる「良心碑」の文言は、弟子安田忠止あての書簡の中で先生が記述したものであって、この文言は先生の良心論の結晶的表現なのであった。同時に先生は説教の人であった。第二公会の牧師として、同志社社長として、先生は教会や同志社や地方諸教会の礼拝の講壇に立って聖書に基づく説教を行った。浮田和民がのちに評したごとく、先生は「情の人であってよく人を感動せしむる力」があり、また海老名弾正が先生の熱涙にむせびつづ語る説教に感動し、生涯を「楽毅の任」を果たすべく決意せしめられた、と記した（浮田あての海老名書簡）ように、先生の説教は真情と力に溢れたものであったようである。しかし、これらの特色は、本巻に収められた説教を読んでも十分には読者に伝わって来ない。それは右のような直接その声咳に接した人びとの印象や手記を通して知るほかはなからう。これに対して、説教の内容とそれを支える思想については、先生自らが書き記した草稿を通してかなりの程度まで知ることができる。その意味で、今回の全集に先生の説教稿が大量に収録されたのはまことに喜ばしいことである。

説教というものは、がんらい礼拝において聖書に基づき神の言をとりつぐものであるので、それを記録して後世に残し、天下に公表するという筋合いのものではない。新島先生と同時代のキリスト教指導者の中には、自己の説教を印刷公表し、のちに立派な説教集として編さんし出版した人びともいた。しかし先生はそれをしなかった。もちろん、先生は講演や学術論文などの公刊もしなかったのだ。説教のみについてこのことを指摘することは当を得ないことも知れないが、少なくとも先生が説教の本質を右のように考えてい

たことは確かであろうと思われる。したがって先生の説教は草稿のまま残されたものであつて、朱筆が入れられ、欄外に補筆がなされ、いろいろな種類のマークが随所に付されている。先生はこれを携えて壇上に立ち、聖霊に感動させられつつ語つたのであつた。全集編集委員会は、入念に原文を再録し、右の補筆、加筆、注記、線、マーク類、朱筆、図示、英文、字配り、行配りなどを忠実に示してくれている。これは骨の折れる作業であつたと思われるが、読者としてまことに有難いことである。完全に文章化された説教を読むよりは、これらの筆ふりに導かれて読む方が、あるいは新島先生の説教の真髓によりよく触れることができるかも知れない。

三

ところで、このような特色をもつ新島先生の説教の内容的特徴はどういうことであつたであらうか。もとより説教は聖書に基づくといへ、説教者も聴衆もそれぞれの歴史的状况において聖書を読み、解釈し、神の言を読み取るわけであるから、新島先生の説教もまた、時代の反映を種々の形で色濃く持っていることは言うまでもない。とくに士族出身の愛国者であつた先生として、近代日本のれいめい期の政治や教育や国際関係や思想や宗教の動向にきわめて鋭敏な感覚を持ち、明確な見解と理念を保持してただけに、これらの説教には随所に、時代の状況に対する批判的な姿勢が見て取れる。欧米文化の盲目的摂取の風潮への警告（四八ページ以下）、伝統的宗教イデオロギー批判（二二ページ以下）、福沢諭吉の功利主義批判（二〇ページ）、「上帝論」における真の神的存在者のせん明

（二九一ページ以下）、偽りのキリスト教指導者に対する批判（六五ページ以下）などにおいて、先生の時代状況に即した説教構成が顕著である。

また論語、孟子、老・莊、史記、その他中国の古典に通暁し、かつギリシア、ローマ、西欧の歴史に明るい先生の強味は随所に見られる。これらの該博な知識を通して先生の歴史感覚はときすまされ、それゆえに説教もまたきわめて的確な予言者のトーンを得たのであろう。

筆者は聖書を専攻する人間であるところから、かねて新島先生の説教の根底をなす聖書解釈の方法や実態に関心を持っていたが、本巻を通読して、きわめて正統的で緻密な釈義の上に説教が組立てられていることに改めて感嘆した。先生の学んだニューイングランドには、十九世紀前半からドイツのテュービンゲンを中心に興つたいわゆる史的批判的聖書学の方法はいまだ十分にその影響を及ぼしていなかったと思われる。とくにアンドーヴァー神学校は一八〇八年の創立いらい正統主義神学の立場に立ち、ユニテリアン神学に傾いたハーヴァード神学校（一八一五年創立）に対抗する神学校であつたので、ここで神学的訓練を受けた先生の聖書解釈の方法や神学的立場が史的批判よりもやはりオーソドックスなものであつたことは当然のことであつたであらう。例えば、「晚餐ヲ守ルコト」（二〇ページ以下）における聖餐論、「肉ニ播ケバ肉、霊ニ播ケバ霊」（三九ページ以下）におけるマタイ四章の釈義、「ダニエルノ夢判断」（二七五ページ以下）におけるダニエル書や詩篇の釈義、「朋友ノ交義ハ天国の写真」（七八ページ以下）におけるイエスへの随従のテ

ーマの洞察などに、きわめて着実で精密な釈義と解釈が施されているのを見ることが出来る。もちろん学術的には、その後同志社の聖書学は基本的には史的批判の方法を摂り入れて自らの学術的伝統を築いて来ており、今日の立場からみれば先生の方法には種々批判の加えられる余地は有存するのであるが、聖書に真正面から相対しその文言に神の言を読みとろうとする聖書解釈の基本的な構えは、今日の聖書学や説教にとってもまさしく頂門の一針たるを失わない。

四

新島先生の説教の内容をもうひとつ掘り下げてみよう。そのための方法として、先生の説教稿の分析と、先生の神学的背景の考察と、さらにこれらに併せてその説教や神学の根本命題の実践としての先生の特徴的な行動についての検討を行うことが必要であろう。説教としては「天父皇督ヲ十字架ニ添テ世ニ賜ヘリ」(二四三ページ以下)が重要である。これは難波(現浪花)教会の一〇周年記念礼拝に招かれて行った説教で、草稿とはいえば完全稿に近い長大なものである。テーマは、人間の墮罪と神の審判とそれを超えた

愛の天啓としてのキリストの十字架の贖罪である。ここには神の創造世界の義の貫徹とこれに自らの自由意志によって背反した人間の罪とその救済が語られ、神学上いわゆる統治説とその解決としての贖罪論がその根底を支えている。このテーマは本巻所収の諸説教の多くを通してみられるが、とくに「十字架上の贖」(二三六ページ以下)、「人間の悪」(三四五ページ以下)、「悔改」(一二二ページ)などに著しい。そしてこのテーマは、先生がアンドーヴァー在学中

マサチューセッツ州レキシントン市の教会で行ったいわばその処女説教のテーマでもあった(「新島研究」二二号所収「神の愛と人の罪」参照)。したがって神の統治・人間の背反・罪の罰・キリストにおける贖いというテーマは、先生の説教の根幹をなすものであったと考えてよからう。

新島先生の神学的系譜の研究としては、故大塚節治元総長の「新島先生の信仰の背景をなす新英州神学について」(「新島研究」第三五号)や藤代泰三教授の「エドワーズ・アマサ・パークの記念説教集」上・下(「新島研究」第四四・四五号)があり、いずれも教えられるところの多いすぐれた論文であるが、それらによると、新英州神学の特色はカルヴィニズムを基調としつつ、神の絶対的支配に対する人間の意志の自由を強調し、ユニテリアニズムに対して三位一体説を護り、贖罪論においてオランダの政治・神学者フーゴー・グロティウスの統治説を導入しつつ、キリストにおける神の贖罪愛を強調したところにある。神の義なる世界統治を人間は自らの自由を濫用して犯したがこれは正しく罰せられねばならぬが、人間はこれに耐えず、また神の義は貫徹されねばならない。それゆえ人間の罪は贖われねばならず、そのためにキリストが人間に代わって十字架につきこれを充足した、神の義と愛は相即的に実現されたというのがこの神学の根本的主張であった。右に挙げた新島先生の幾編かの説教稿は、まさにこの新英州神学の主張に沿って構成されていることは明らかである。

先生のこの新英州神学を背景とする説教と神学の実践行動における見事な反映として、いわゆる自責の杖事件をあげることができよ

う。「天父基督ヲ十字架ニ添テ世ニ賜ヘリ」の論旨は、先生が自己を鞭うつことによって、犯された法秩序を回復し、かつ犯した学生たちの罪を贖ったその行動にまさしく一致したものであった。この説教中に先生が挿入したジャック少年と教師のエピソードは、授業に遅刻しながら反省の色を見せぬ学生に教師が縄木を与え己が手を少年に打たせるという筋であるが、先述のレキシントンでの処女説教にも同じ趣旨の王と王子の物語が語られている（「新島研究」第二号八ページ）。「十字架上の贖」においては、非行の息子を赦さぬ厳格な父と反省せぬ子の間にはさまれた母親が、秩序と愛の両者を相即させるため遺書を残して自害したという例話が用いられており（本巻三三九ページ）、これもまた先生の自責の杖におけるモティーフを示すものである。この自責の杖のモティーフを秩序維持と贖罪愛のいずれに重点をおいて解するかについて、大塚節治先生は前者をとり（前出論文一四、一五ページ）、藤代教授は後者に傾いている（前出論文（下）、二四ページ）。鎌谷裏先生の力作「新島裏におけるキリスト教信仰―特に贖罪論を中心に―」（「新島研究」第五六号）は、新英州神学の救贖思想から説き起し三編の説教の分析を通して、新島先生の信仰の基本線がパークの贖罪論に負うところ大であったことを確認し、自責の杖事件のモティーフは、秩序維持とともに贖罪愛信仰と教育愛にあったと結論している。（なおこの事件とその解釈については「同志社百年史・通史編」一、一七四―一九〇ページ参照）。筆者もまた、新島先生の自杖が単に校則の維持や法秩序の尊厳を示す目的で行われたとは考えることができない。それは先生の諸説教の強調点ではない。そしてそれはパークをはじめ先生の学

んだ当時の新英州神学の力点でもなかったことは、藤代教授の右にあげた詳細なパーク研究によって明らかである。神の法は貫徹されねばならない。背反した人間は自らその罪を償うことはできない。キリストは神の義と愛の現実化として十字架上に死んだ。これが救済ということである。新島先生はこのモティーフを若き日にアーモストやアンドーヴァーで体得し、説教においてそれを語り、かつ実践したのであった。徳富蘇峰の言う「情の人」新島先生は、冷厳な法の人でもなく、緻密な理の人でもなく、まさにキリストにおいて具現された神の愛の説教者、教育者、実践者であったというべきであらう。

与えられた紙数をすでに超えたので教会合併問題関係稿と第二公会録事についての論評は割愛せざるをえない。巻末の注解と解題はきわめて貴重である。本巻の編集に当たられた高橋虔先生をはじめ編集委員諸氏の労を多としたい。

（大学神学部教授）

